

古代ギリシアで生まれた「哲学の源流」

生井利幸

古代ギリシア人は、紀元前7世紀頃から自分たちの国土を「ヘラス」(Hellas)と呼び、主に、オリエント人(特にペルシア人)をバルバロイ(barbaroi)と呼んで差別化を図り、民族的な結束を強化した。ヘラスとは、元来は南テッサリアの一地名であったもので、当時のギリシア人たちは、自分たちを自ら「ヘレネス」(Hellenes)と呼んでいた。

ヘレネスとは、英雄ヘレーン(Hellēn)の子孫。バルバロイは、「聞き苦しい言葉を喋る人」という意味であり、この言葉には、「無学の、野蛮な」などの軽蔑的な意味合いがそこに内在していた。

言うまでもなく、古代ギリシア哲学は、西洋哲学・思想の基盤を成すものであり、広義には、西洋社会で発展した学問・文化・芸術等に多大な影響を与えた「西洋の精神の源流」と言えるものである。したがって、広範にわたって西洋の精神を理解するには、まず第一に、その源流である古代ギリシア哲学を学ぶ必要があり、逆に述べるならば、古代ギリシア哲学を学ぶこと自体、それは「西洋の精神の基盤」を学ぶことを意味すると言える。

古代ギリシアでは、ポリス(polis)と呼ぶ都市国家がギリシア半島に散在し、それぞれ小規模の地域ごとに自衛組織を形成していた。ポリスの一つアテネは、紀元前8世紀において王政から貴族政へと移行。その後、紀元前6世紀に民主制が樹立し、ペルシア戦争(492~449B.C.)の勝利から紀元前5世紀後半まで民主制が繁栄した。

民主制の主体としての役割を担ったのは一般市民であり、彼らは私有地を所有し、それぞれ経済的には独立していた。ポリスの中心にはアクロポリスと呼ばれる丘があり、そこでポリスの守護神が祭られていた。一般市民は「互いに共通の祖先を持っている」という共通認識に基づき、守護神への敬虔なる信仰心の下、相互に団結意識を高めていった。また、アクロポリスの麓にはアゴラと呼ばれる広場が存在し、アゴラでは、一般市民同士、極めて自由な雰囲気の下で様々な問題について意見の交換が成された。

古代ギリシアでは、いわゆるディケー(dikē)と呼ばれる「正義」が何よりも重んじられていた。当時のギリシア人は、自己中心的な考えは自ら抑制すべきものであり、「ポリスを維持するには、個々の一般市民がそれぞれの持分を守るのと同時に不当に他者の持分を侵害してはならない」という原則があった。紀元前6世紀初頭、ギリシアの七賢人がデルフォイを訪れ神アポロンに捧げたとされる「汝自身を知れ」という格言は、本来においては「身の程を知れ」、「分を弁えろ」という意味が内在していた。当時のギリシア悲劇の多くが「自分に与えられた運命に逆らうと、その人間は、破滅という結末を迎える」という話になっ

ているのは、ギリシア悲劇の背景には、復讐の女神ディケーの怒りにふれることは恐ろしいことだという観念がそこにあったからだ。

ギリシアの一般市民においては、「スコレー(scholē)」（暇）を持つことは自由を謳歌する市民としての特権であった。「暇」、即ち、自分の判断で自由な時間を持つということは「自由な立場で自由に思索するための活動を実践できる」ということを意味し、これは即ち、「理性」(logos)を駆使・発展させていくことに直結することであると考えられていた。

やがて、スコレーを持ち、理性を介して深い思索・探求を試みる人々の中から、次第に、自然の根源としてのアルケー(「初め」「根本」を意味する概念：archē)について探究していく潮流へと推移する。このアルケーの探究にこそ、いわゆるギリシア哲学の源泉をうかがうことができるのだ。